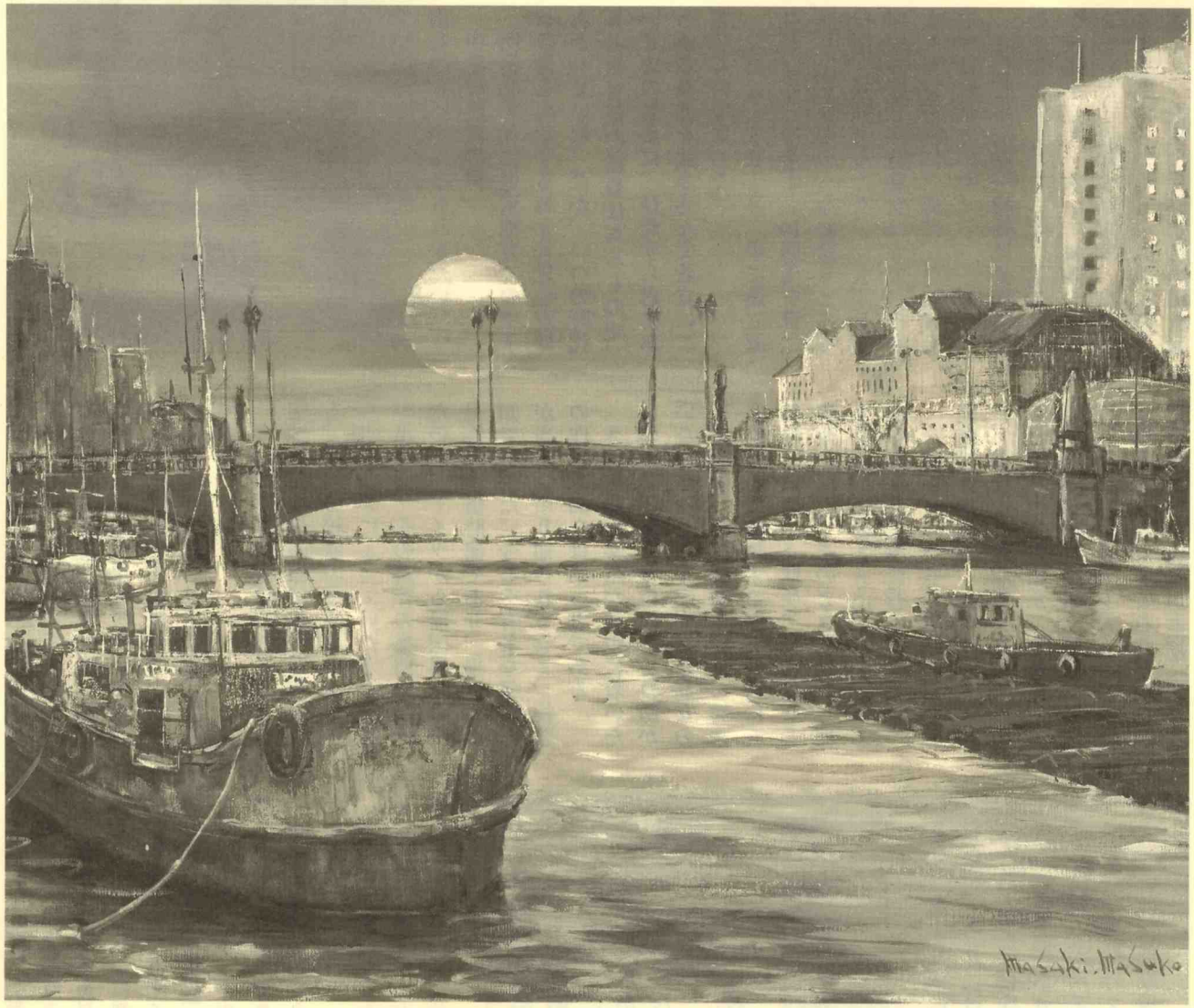
2012年釧中・湖陵は百周年を迎えます

くまざさ

第54号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成21年3月1日
印刷所
藤田印刷㈱



絵と文　増子　正樹（湖陵20期）　「夕映・釧路川」原画サイズはF15号

めぐる季節のなか、豊かな表情を見せる母なる川、釧路川。幣舞橋の中心に落ちる秋の夕陽は心に残る原風景の一つである。

川岸の漁船、上流へ引かれてゆく筏は静かに一日の仕事を終ろうとしている。

くり返される悠久の刻。空も海も茜色に染め上げて沈む太陽。

明日への希望と勇気を鼓舞するように、陽は沈み、陽はまた昇る。

この絵は釧路信用金庫（本店釧路市）の平成21年版カレンダーとして採用されました。

目次

校歌の誕生……2頁
井上君箱根を快走……3頁
「誠愛勇から」湖陵13期生の巻…4.5頁
同窓会総会・懇親会だより……6頁
セコム会長・木村氏特別講演……7頁
教職員湖陵会だより、湖陵ギャラリー
ふるさとに朗報あり、古里釧路に注目…8頁
ステファノ木内氏死去・編集後記

湖陵同窓会HP　http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/

校歌の誕生

景観と若人の命からの詩

湖陵1期　奥田　達也

まもなく開校百周年を迎えようとする母校湖陵高の「校歌」について書かせて戴ける光栄にあずかれる、とは思ってもいなかった。

在学中は軍国少年とて、悪評高い日本陸軍の悪癖ともいうべき下級生いじめに染まっていた。戦後の民主主義に暴行こそ影をひそめたが全校生徒への説教は、応援歌の指導の美名のもと絶えずなされた。「誠愛勇」の校訓や「日出づる国の北陲に」で始まる校歌の心を己れの精神にしているのなら、あるべからざる行いであった。

校歌・校訓は歌うだけ、唱えるだけのものではなく、その精神を己が心の糧として、生きて在る限り尊ぶべきものなのである。いま齢ようやく七十八歳にして意味深に感ずる。

青春の日の雄叫びと感激とが老輩の胸に込みあげ、涙と共に流れ出るのをいかんともしがたい。

中学校設置の声

明治40年代に道東地方での中学校設置を要望する地元父兄の声はあがっていた。だが、いつの時代も上級官僚の横暴はあるもので、いじめの暴挙に、ひたすら耐えあらゆる条件を飲み込んで設立にこぎつくのであった。

大正元（1912）年に設立認可となり、卒業生も10回生を世に送り出しながら、なお誇りとする校訓、校歌をもたない。大正8年開校の庁立釧路高女はすでに校歌をもち寄宿舎に、街に、そのメロディは流れていた。

3代目平沢虎一校長は昇任早々の昭和2（1927）年に「誠愛勇」の校訓を定め、次いで校歌の制定を急いだ。作歌の権威者、土井晩翠に委嘱するつもりの来釧に時を逸した。校長は菅原覚也国漢教諭に校歌選定委員を命じ在校生から歌詞を募る。生徒30名と覚也も一編を作り文学博士高野辰之に選定依頼、高野は覚也の四節原案を添削して三節として出来たのが、今なお湖陵高で歌われる「釧中校歌」である。

ついで平沢校長は旧知の東京音楽学校教授信時潔に作曲を依頼する。日本の校歌の多くが山田耕筰らベテランによっていたが、特徴が出ない。その耕筰の推薦を受けたのが、ドイツから帰国早々の新進作曲家信時潔であり、平沢の旧知であった。今こそ有名な信時だが当時は余り知られてなく、校歌の作曲も釧中は早い方である。

さて作曲の楽譜が釧中に着いたものの、音符に自信のある教師がいない。やむなく庁立釧路高女の音楽教師・上野音楽学校卒の秀才伊東わかに依頼するが、のちに五味与一（釧中4回生）夫人になる伊東わかは、そのとき着任したばかりで、男ばかりの釧中などへ、とても歌曲指導に行けない。

そこへ4年さきに着任していた同校の体操教師、当時からモダンといわれかっ達な佐々木梅子（のち釧中7回生村田正二と結婚、三原新太郎初代釧路市立病院長に請われ夫婦とも養子となり三原姓）が助太刀に現れてくれた。

「美人の若い教師が本校へくる」とて釧中生徒は大騒ぎ。校舎の窓々から、いま現れるかいま来るか、と全生徒が首を長くして待ち構えている。そこに颯爽と現れた両女教師。当時は全く珍しい洋装の2人。全生徒は歓声を挙げた。全く期待どおり。いや、それは想像以上のデビューであった。すでに女学生は洋服に統一されてはいたが…。

屋内体育館にようやく全校生徒を並べる。壇上にあがった両女教諭に見とれる生徒。三原教諭らは、壇を背にして、生徒の監視に真剣である。嫌がる伊東先生に、無理に頼んで歌曲指導にきてもらった。万が一にも失礼があっては、釧中の名折れ、二度とお願いは出来ない、と。かくて校歌指導は行われ、生徒に歌われ、4代目幣舞橋開通式に間に合った。

菅原覚也の遺稿にいう「雄大な郷土の景観と夢多き若人の命の中から生まれるべくして生まれた詩である」と。

応援歌のミステリー

湖陵1期　奥田　達也

なぜに開校数年で「湖陵に長し八カ年」と始まる応援歌1があるのか？これから年月を経ることはわかるが？応援歌5「伝統長し八カ年」も同様であろう。

あと数年で開校百年を迎える今、あまり気にすることでもない。これには、いつの世にもある上部官庁の役人の独善と意地悪があり、それに対する反抗心がある。強い抵抗によって前進のスピードは増す。この物理原理は人間社会にも全く通用するのである。

道都の札幌、そして商都小樽、軍都旭川さらに早くに開けた根室に比べ釧路は中途半端と見られていた。釧路湿原を無用の長物視していた時代は長いのである。

漁師の町特有のお人好しにも意地があり、釧中（湖陵）魂を唄ったのだ。ただ詩藻豊かなわりに作曲の才が薄く他校の模倣は寮歌同様に借り物が多い。

3大駅伝で快走
最後の年、上位進出を

日本大学陸上競技部　井上 陽介さん
平成18年卒・湖陵58期

新年が明け、大きなスポーツ大会の一つが箱根駅伝です。1月2、3日、東京の読売新聞本社と箱根芦ノ湖間往復の約218キロを23の大学が、10人のランナーで走り抜きます。2日目、日本大学の8区を任されたのは釧路湖陵高校出身の井上陽介さん（3年）です。テレビに井上さんが映し出されると、「釧路湖陵高」としっかりテロップが流れました。今後のさらなる活躍が期待される井上さんと高校時代の陸上部顧問、後藤洋先生にお話を聞いてみました。

井上君は、釧路管内標茶町の出身で、緑陵中学校（現青陵中学校）時代に、全国都道府県対抗駅伝の北海道代表として出場しました。湖陵高校に入学し、陸上部に入ってきた当時について後藤先生は、「体もきゃしゃで、精神的にもちょっと心配だった」と振り返りますが、めきめきと心身ともに成長しました。2年生になると地道な努力の成果が現れてきました。まず全道大会の1500メートルで見事に優勝し、島根での全国大会にのぞみました。あと一歩というところで、決勝進出は逃しましたが、後藤先生は「中距離での手応えを感じたのではないでしょうか」とこの大会が大きな転機であったことを話しています。

さらに3年生になると1500メートルとともに、800メートルも全道優勝しました。1500メートルは2連覇、800メートルは初の栄冠でした。満を持して出場した千葉でのインターハイ、1500メートルは10位、そして800メートルでは5位入賞を果たしました。井上さんは、「5位入賞したことが、高校時代、一番印象に残っていますし、陸上に対する大きな自信となりました」と話しています。

高校時代の井上さんは、自分でメニューを組み立て、黙々と練習に励んでいたそうです。「先生には迷惑をかけました」と井上さんは笑っていましたが、「フォームなど特に〝いじる〟こともなかったですよ」と後藤先生。何も言わなくてもお互いに信頼していたのではないでしょうか。また、ほかの部員も、「身近な目標」としていたようです。

ちなみに、高校時代、陸上以外の思い出は、やはり文化祭だそうで、特に行灯行列では、照明を担当していたそうです。

800メートル5位に入賞した井上さんの走りは全国の大学から注目されました。そのころから「箱根」の文字が浮かんできたのでしょうか、日大に進学し、体づくりから始まりました。

3年生になり、「学生三大駅伝」のうち、まず10月には出雲（島根県）に出場しました。5区5キロを14分57秒で走り、5位で最終ランナーのダニエル選手にたすきをわたし、総合優勝を手にしました。

続く全日本（名古屋→伊勢）では、7区11・9キロを激走し、箱根を迎えました。箱根の8区は平塚から戸塚までの21・5キロという長丁場です。たすきを受け取ったのは10位。来年のシード権をかけた熾烈な戦いです。井上さんは「いつも速いペースで失敗しているので、抑え気味でスタートしました」と振り返ります。初出場のプレッシャーか、なかなか自分のペースがつかめず、「よく分からないうちに終わってしまった」そうですが、しっかりと役割を果たし、同じ順位でたすきを9区のランナーにつなぎ、日大はその後、7位に躍進しました。

いよいよ今年は最上級生です。目標は、「三大駅伝大会に出場し、区間上位に食い込みたい」と井上さんは決意を新たにしていました。

星　匠（湖陵30期）

2005年6月、釧路市民陸上競技場で行われた全道高校陸上競技選手権800メートルで優勝した井上さん
（釧路新聞提供）

誠愛勇から

湖陵13期生の巻

長く強い絆

湖陵13期会長　石前　弘

湖陵13期生、昭和36年卒業です。高度経済成長の兆しとともに人々の価値観や社会意識が変化し始めたころ。学校・先生が信頼され、教育ママ・いじめ・不登校などの言葉は聞かれなかった。生活は楽ではなかったが、親も私たちも進学や就職などにあくせくせず、気持ちに負担が少ない時代だった。

正月など同級生の家に担任と一緒におじゃました。担任の公宅・下宿にも行った。下駄履きで通学、北大通を闊歩した。映画を観て純喫茶店で語り、談笑した。「梅楓塾」で勉強と精神修養に励む生徒、英語の小説を先生から借りて読破する女生徒もいた。先生たちと日米安全保障条約改定反対デモにも加わった。文武両道、あっという間に3年になり進学に就職に慌てた。その頃の高校生活、それぞれの思いが生徒会誌「湖陵」第11号に綴られている。

卒業してもうすぐ50年、あの頃に思いを馳せて同期3人が思い出を綴った。生徒会誌の校正を手伝った新保征敏さん、釧路体操界でその名を「新釧路市史」にとどめる矢萩3兄弟の末弟矢萩邦男さん、栄光の全国制覇アイスホッケー部ゴールキーパー森茂晴さん。

我ら13期は、8月第2土曜日を「13期会の日」とし、毎年全国の同期に案内している。間もなく50年、私ほか9人の幹事は万年世話役。ゴルフ有志は毎年春から秋に月1回の定例会を催し、全国から集まる。絆は長く強い。

湖陵13期会東京同期会
平成13年11月17日　三井アーバンホテル銀座

友が語る「我が師の恩」進学の学費を援助

生徒会OB　新保　征敏

高校進学　「進学」この言葉にも一人一人の思いがある。経済的な理由で進学できなかった友もいる。不合格になり私立校や予備校に進んだ仲間も少なからずいた。

入学を待ちきれず、「どんな学校だろう」校舎を一周してきた友もいる。待望の入学式、なんとも新鮮で厳粛だった。格調ある挨拶や祝辞、文語調の校歌、式後の生徒会歓迎の言葉、胸を張って聴き「伝統校の一員になれたのだ」と実感した。釧中1期生に「世界七賢」の一人八代斌助氏がいる。キリスト教牧師、英国王室のバイブル教師、立教大学理事長だ。

昼休み応援歌の練習。体育館に広々と整列、応援団員は竹刀を持っていたが、振ったのは見たことがない。応援歌はNO1からNO8まである。驚いた。これも伝統校か。

授　業　一言では楽しかった。知らないこと、わからないことを沢山教わり、教示された。学問の素晴らしさ。真理とその探求、芸術、文化、それらが私たちの生活を向上させ豊かにしてきたこと。そのために多くの先達が大きな努力をしてきたこと。そして貴い犠牲をしてきたこと等々。教科書、学問以外の人生の広きにわたる話・経験、恋愛やエッチな話も。理科の実験に熱中した。

学校行事　湖陵祭は前夜祭の行灯行列など。スポーツ大会は全校マラソン（男子）、バレーボール（女子）など。それにフォークダンス、修学旅行、兎狩りと多様で楽しかった。物理学ノーベル賞の湯川秀樹博士が来校、講演されたが話の内容は記憶にない。行灯を近くの担任宅で作ったことも。

全校マラソンコースは旧星園高校横、旧江南高校前、城山、南大通り、富士見町の丘陵地。起伏が多い。富士見坂の登りが勝負所。星園横は同校女生徒を意識してトップ通過、後はメロメロ。先生も一緒に走った。女生徒は参加しなかった。旧制男子校の伝統か？

修学旅行はまた格別。汽車で寝るため座席に渡す板を持ち込んだ。釧路に戻ってからは急に男女の仲が親しげになった。男だけのクラスは、やるかたない憤まんも。悲喜こもごも。

勉強不足と修学旅行を断念した同期がいた。富士見町の「梅楓塾」に通っていた。塾長は釧中1期生の中川久平氏。「精神満腹」がモットーの塾長は、「修学旅行ではできない体験をさせてやる」と、塾で生徒数人に「角サン」1本と10本入の「ピース」1箱を試させてくれたそうだ。因みに中川大先輩は市教委の教育委員。

部　活　アイスホッケー全国優勝。釧路駅に出迎えて北大通りをパレード。誇らしかった。仁々志別川の十條製紙リンクにも行って応援した。休憩タイムのリンク整備が大好きだった。野球も強く、学校すぐ近くの市営球場によく観戦に行った。全校が学年別などで応援した。

スポーツ部、文化部、生徒会本部、様々な部活動があった。そんな部活の一つに打ち込む中学同級生の姿があった。家が貧しかった。修学旅行にも行かず、進学もあきらめていた。担任のM先生、彼の家を何度も訪れた。「授業料他の学費は私が…、ぜひ進学を」、両親と彼はそれを受けた。彼は勉学だけでなく部活でも全国大会に出ると決心する。学校まで1時間以上の徒歩通学、部活の練習には悲愴感さえあった。そして彼は念願を果たす。勤めて学費も返済する。5年前の10月に東京でクラス会、彼はすすんで幹事に。私はその時にこの経過を知った。恩師は翌春逝去された。

私の体操「金メダル」東京オリンピック予選出場

体操部OB　矢萩邦男

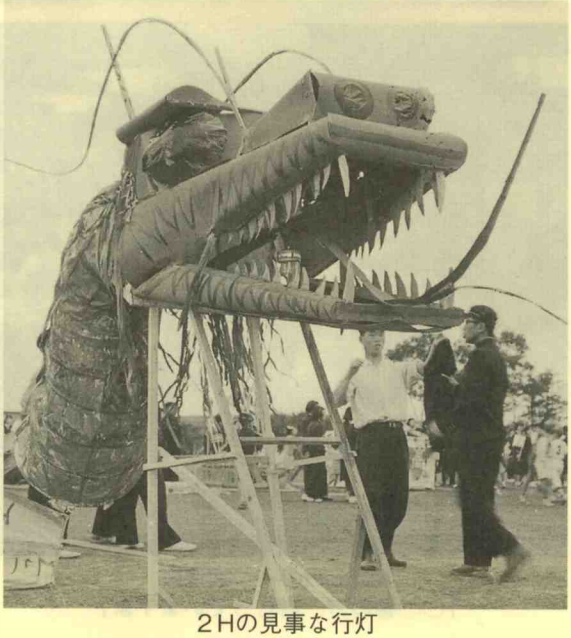
高校に入ったら何か部活をやろうと決めていた。「トレパンとトレシャツがあれば3年間だいじょうぶ」の部員募集ポスターに誘われ、体操部に入部した。

技量が未熟な1年生。それでも心優しい先輩は7月の全道大会に参加させてくれた。当時釧路には鞍馬器具がなく大会場で初めての練習、居残って練習した。他校選手（札幌・旭川・函館）は圧倒する上手さで、釧路勢は緊張のしっぱなし。床運動の方向を違えて場外演技、規定演技を間違える、普段起こりえないことが起こった。1日目が終ると、これで大会は終りと皆は夕食のテーブルを囲んで楽しんでいるが、私一人だけ壁にもたれて深刻な表情をしている写真が残っている。私一人が予選を通過し翌日の自由課題に残った。もちろん自由課題の演技を一度も考えたことも試したこともない。大会の度にそんな繰り返しでしたが、努力の甲斐あって一度だけ全国大会出場を果たせた。

湖陵祭前夜祭の行灯行列、出発前のクラスメート。ゲタばきの生徒も。

本当に練習に良く励んだと思う。大会前は夜の11時、12時まで。体育館の電気を消されたこともあった。そのためアイランプを持参して練習した。それを使うと影ができる。その影でフォームを直したり、技に入るタイミングを調整できる。電気が消えてからの練習に熱が入った。正月三が日を除く1年中、体育館で練習の毎日だった。

あの自由な校風、文武両道のもとでの練習。お陰で伸び伸びと楽しい高校生活ができた。毎日毎日、基本となるところを何回も繰り返し真剣に練習する、学習する。これが人生の精神基盤づくりになると思う。私は人生を生き抜く糧を育んでもらったと思っている。今の生徒の皆さんにも、自由な校風のもとで、新しい時代を生きる発想力・創造力を磨いてほしいと願っている。



2Hの見事な行灯

湖陵を卒業後、体操部のある会社を選んで就職し体操練習試合、ステックとパックを使ってシュートとパスの練習。他の体育部はこころよく屋体スペースの一部を空けてくれた。

結氷期の本格練習は十條製紙（現日本製紙）のリンク。今はない十條製紙娯楽場裏、仁々志別川の岸にフェンスを回した屋外の川リンクだった。気温マイナス20℃もの厳寒、朝4時に起きて手足をかじかませながら練習に励んだ。それから学校へ。夜遅くの練習もあり授業中は睡魔との戦いだった。鏡のようなリンク造りのために、お湯を搾った雑巾で氷面を拭き溶かす整氷の手伝いもあった。よく耐えて続けることができたと我ながら感心する。

高校3年間、多くの人の「誠」と「愛」に支えられ「勇」気づけられて、精神力・体力を錬磨することができた。先輩・後輩とひた向きに努力に努力を重ねた練習・チームワーク。その培われた力、耐えて花咲く湖陵魂の魔力?、その存分な発揮が全国制覇の栄光へ導いた。

卒業後、半世紀になろうとしている。顧みれば、あの厳しさも苦しさも人生の良き思い出となり、培われた精神はわが人生に脈々と息づき、今もって心の支えになっている。

厳寒期4時起きの練習 アイスホッケー2度目の全国制覇

アイスホッケー部OB　森茂晴

湖陵アイスホッケー全国制覇2回。昭和33年に次ぐ昭和35年の2度目の全国制覇は、我ら13期と先輩12期を主力に、全道大会・インター杯・国体優勝の完全制覇であった。当時の全国高校2強の苫小牧勢・日光勢をよくぞ撃破できたと思う。

思い起せば、夏は千代ノ浦海岸と春採湖1周のランニング。千代ノ浦の砂浜では、水産加工場排水の魚臭を喘ぎながら嗅いで走った。冬は少しでも早く氷に乗りたい、その一心で鶴ヶ岱のひょうたん池など結氷を求め歩いた。学校の体育館ではバスケットボールの

盛況500人が参加
旧交を温める
平成20年度
釧路湖陵同窓会総会

いくつになっても仲の良いお友達

釧路湖陵同窓会（栗林延次会長）の2008年度総会と懇親会が昨年8月9日に釧路市内の釧路キャッスルホテルで開かれました。総会には、釧中、湖陵の卒業生約500人が参加し、高校時代の思い出話に花を咲かせていました。

校歌を全員で斉唱したあと、亡くなった会員へ黙祷をささげました。続いて栗林会長が、「4年後には開校から100周年の節目を迎えます。会員皆さんの意見を聞き、記念行事の準備を進めたい」と呼び掛けました。このあと、100周年事業への100万円拠出、同窓会館改修費30万円の拠出、また、5月に行われましたセコムの木村昌平会長（湖陵14期）講演会の共催などが報告され、2007年度の決算とともに承認されました。

懇親会では、ステージでは湖陵高校チアリーダーによる華麗なチアリーディングや合唱部、器楽部の演奏が披露されたほか、抽選会も行われ、最後まで盛り上がっていました。

今年の同窓会総会は27、37、47期が当番です。

星　匠（湖陵30期）

お楽しみの一つ抽選会
「○○番の方、当たっていますよ」

現役の器楽部による演奏も盛り上がりました

東京湖陵会が20回
6月の総会に参加を

「東京湖陵会」は平成2年に「湖陵同窓会東京支部」として、発足しました。

平成2年4月28日東京のダイヤモンドホテルにおいて第1回設立総会が開催され、315名の同窓生が集り、会場は熱気にあふれておりました。近年は出席者が100名前後で推移しておりますが、一時はわずか60名といった低迷の時期もありました。それでも年に1回の総会は続けて参りました。

そして本年（平成21年）第20回総会を迎えることとなりました。私達はこの20回総会をひとつの節目としてとらえ、改めて多くの同窓生に参加頂き、盛大に挙行したいと考え、役員が中心となって準備をしているところであります。釧路そして北海道在住の皆様もお時間がございましたら、是非ご出席願いたくご案内申し上げる次第です。

なお総会は次の通り開催されます。

日時：平成21年6月20日（土）14時30分～

場所：日本青年館4階「アルデ」

東京都新宿区霞ヶ丘町七番一号

03-3475-2525

琴の橋本さんが演奏

釧路教職員湖陵会

平成20年度の釧路教職員湖陵会（戸松栄会長）の研修会と懇親会が、昨年10月11日にアクアベール（旧栄町会館）で行われました。

講演会の形態が多いのですが、今回はたまたま前日に釧路入りしていた、25絃箏ユニット「心花」の橋本みぎわ氏（湖陵52期）の演奏を主にした研修会を開催しました。

橋本さんの演奏を中心に行われた研修会

橋本みぎわ氏は、幼少の頃から母はるみさんに箏・三絃を習い。1991年全国小中学生箏曲コンクール小学生の部1位、牧本賞受賞。1998年、全国高校生邦楽コンクール1位。1999年、第6回高校生国際芸術コンクール箏部門1位と全日本のコンクールでトップをとり続け、2004年東京藝術大学音楽学部邦楽科を卒業しました。藝大卒業後、大学の同級生のななえさんと「心花」を結成し、全国や海外で演奏活動を続けています。

この日は、5枚目のCD「一想花（ひとおもい）」が発売された直後で、そのCDからの楽曲を中心に演奏していただきました。さすが藝大卒と唸らせるテクニックに加え、にじみ出る性格の良さ、さらにコケティッシュな魅力も持ち合わせたお二人の演奏とMCに幸せなひとときを過ごしました。ぜひ、100周年事業のどこかにプログラムしていただき、若い同窓生のプロフェッショナルな表現をたくさんの人に聴かせたいと感じました。　川端紀一（湖陵11期）

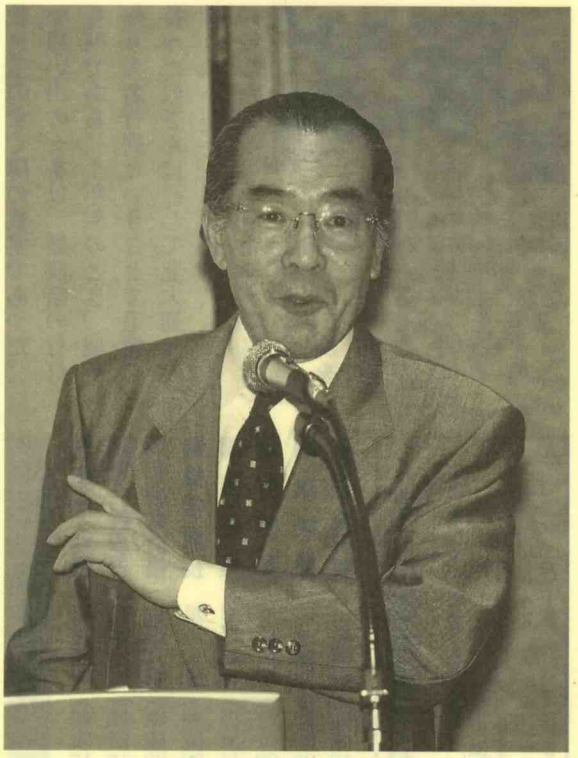
「流汗悟道」を説く木村氏（セコム会長）が特別講演

洞爺湖サミット会場ホテル所有会社、セコム会長の木村昌平氏（湖陵14期）を招いた特別講演会（釧路湖陵同窓会、釧路商工会議所、釧路新聞社共催）が昨年5月9日、釧路プリンスホテルで開かれました。

木村氏は、釧路湖陵高校を昭和37年に卒業後、同志社大学に進学しセコム（当時・日本警備保障）に入社しました。

講演のテーマは「流汗悟道～魂を揺さぶる人に～」。木村さんは、〝神の沈黙〟3部作と呼ばれる『鏡の中にある如く』『冬の光』『沈黙』などを手がけた監督イングマール・ベイルマンにあこがれ、スウェーデンに行く資金稼ぎにセコムに入社しました。成長の源泉に経営哲学と〝捨てる勇気〟を掲げ、「利益は社会から与えられる報酬。新しい事業を始める際は、会社の利益より、社会のために有益かという判断基準に立ち戻ります」と説明していました。

また、資源を持たないセコムにおいて「専門知識や技能が商品。社員の心一つで品質にブレが出ます。心と情熱が大切で、会社の哲学を社員に説明できないと実現できません」と指導者の要素を指摘しました。また、「マネジメントとは人を動かすこと、人の魂を揺さぶり動かすこと。魂に汗をかき、人の道を追い求めることです。肩書きを外した時に、その人の価値がわかります」と話し、参加者のみなさんは熱心に耳を傾けていました。　星　匠（湖陵30期）


「マネジメントは人を動かし魂を揺さぶること」と木村氏（釧路新聞提供）

湖陵ギャラリー

釧路湖陵高校1階に、卒業生や教職員の作品を展示した「湖陵ギャラリー」＝写真＝があります。書や絵画、彫刻、陶芸、写真など約30点が展示されています。それぞれの作品からは、現役生徒への思いが伝わる力作ばかりです。ぜひ一度、足を運んでみては。開館日時などの問い合わせは学校までお願いします。

古里釧路に全国が注目

昨秋来、釧路市動物園の話題が何度も全国放送され注目を集めた。一つは昨年生まれた双子のアムールトラが2頭とも生まれながらにして脚に障害があって満足に歩けない。後脚を引きずりながら必死になってジャレ合ったり前に進もうとする姿は見る者に同情と感動を呼び思わず頑張れと応援したくなる。おまけに母親は育児を放棄し乳を与えず人工哺乳する飼育係員の世話は大変だ。今後のことが心配で2頭とも酪農学園大学へ送られ診断の結果、手術しても直る見込は少ない。この放送後、双子のトラ、ココアとタイガに全国から頑張れと寄付が集まった。

もう一つ、札幌円山動物園生まれのシロクマ君ツヨシ（4才）が釧路市動物園へ生後3ケ月でムコ入りして飼育されていたが、この度、雄でなく雌であることが判明、関係者は戸惑いをかくせなかった。この知らせを聞いて早速他の動物園から是非私の所へ嫁入りして欲しいと引き手あま多。無差別殺人、派遣社員契約打ち切りなど暗い世相の中で釧路発のニュースは人人の心をいやしたに違いない。

田巻恒利（湖陵18期）

ふるさとに朗報あり

昨年11月21日、朗報が入った。環境省は07年度の全国の河川や湖の水質測定で阿寒川下流（釧路市）を水質1位の河川として道内2水域、道外2水域と共に結果を発表した。初の全国一清流となった阿寒川は特別天然記念物マリモやラムサール条約登録地で有名な阿寒湖を源流地として太平洋に注ぐ長さ100㎞弱の二級河川である。大正6年、今の新釧路川へ流路改変工事が終えるまで釧路市旧地名阿寒太で釧路川に合流する釧路川最大の支流であった。それまでは洪水をくり返し明治期に入殖した鳥取開拓民を苦しめた。大正9年の大洪水で阿寒川は釧路市山花で転流し釧路市大楽毛から太平洋へ注ぎ旧阿寒川の一部はニニシベツ川と改称し今の姿にとどめる。

雄別炭砿が盛んな頃、洗炭の汚水が阿寒川の支流舌辛川に注ぎそこから下流も真黒な阿寒川であったことを覚えている。母なる川と人間は言うが、母なる川は恵みを与えるだけで、その見返りを求めない。例えその身を汚されても文句を言わず唯滔々と永遠の時を刻む。古里の川は実に有難い。

田巻恒利（湖陵18期）

ステファノ・木内さん死去

釧路出身、声楽家

声楽家のステファノ・木内（本名・木内清治）さん＝釧中31期＝が、昨年10月13日に東京都小平市の病院で死去しました。79歳でした。

木内さんは、1928年に釧路市で生まれ。48年3月に釧中を卒業後、国立音大へ進学しました。留学先のイタリアから55年に帰国し、その後は新人演奏家を大胆に起用したコンサート「期待される音楽家の夕べ」など、斬新な企画を次々と発表ました。現在まで、国内外で活躍する声楽家700人以上、ピアニストやその他楽器演奏者1000人以上を音楽界に送り出しました。

母校での演奏会にも意欲を燃やしていました。心からご冥福をお祈りします。（湖陵30期・星匠）

編集後記

▼昭和31年、湖陵高校に入学。体育館が火災のためになかったので入学式は廊下で実施された。どんなところでの入学式であっても、とても嬉しかった。

▼音別町尺別炭砿からの通学だったので、当然汽車通学であった。炭砿鉄道から国鉄に乗り換え、釧路まで2時間半位の通学で、日の短い冬などは暗いうちに汽車に乗り星を仰ぎながらの帰宅であった。

▼3年間通してクラスは、H組。1、2年の時は便所のすぐ近くの教室で、よりによって3年の時は職員室のすぐ隣の教室であった。

▼思い出の一番は、湖陵祭の行灯行列である。1年生のとき、城を作り大名行列ということで毛槍を持った奴さんに扮して北大通りを練り歩いたことを今も思い出す。帰校したあとのフォークダンスはまた格別で、胸をドキドキさせながら女子の手を取ったものだ。

（写真、右から）増子正樹・川端紀一・奥田達也・星匠・田巻恒利・佐藤文昭・渋谷倫之

▼湖陵を卒業してから早半世紀が過ぎてしまった。釧路駅から北大通りを経て現ハローワークのある校舎まで約20分でよく通ったものと感心しているところである。そして校舎も鉄筋建てとなり現在位置へ移転したが、春採湖のほとりの岡、つまり湖陵に建てる学び舎には変わりがないのである。

▼あと数年で百周年を迎えることになるが、同窓生が手を携えて、成功裡に終わらんことを願っていることであろう。

川端紀一（湖陵11期）

釧路湖陵高校
〒085－0814
釧路市緑ケ岡3丁目1番
TEL（0154）43－3131
ホームページ
http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/

くまざさ編集委員会

同窓会会長　栗林延次（湖陵17期）
同窓会幹事長　島本幸一（湖陵19期）
同窓会会計長　佐藤文昭（湖陵22期）
編集委員長　星　匠（湖陵30期）
編集委員　川端紀一（湖陵11期）
編集委員　増子正樹（湖陵20期）
編集委員　渋谷倫之（湖陵26期）
編集委員　田巻恒利（湖陵18期）
編集事務局長

くまざさ編集委員会
〒085－0014
釧路市末広町2丁目4番地
栄屋旅館内
TEL0154（23）0241
手動切替FAX
0154（23）0242